



お ち ほ

第 13 号

発 行 者
増 田 正 司

1986年 5月10日 発行

社会福祉法人 椎の木会 落穂寮

冬の朝

落穂寮の子どもたちとインソール

寮長 増田正司



例年になく厳しい寒さの日々が続いておりますが、お元氣でお過ごしでしょうか、お陰さまで寮

や生活ホームの子どもたちや先生は、寒さに負けないで元氣に過ごしておりますのでご安心下さい。

厳冬の朝も、子どもたちは六時半に起床します。冬は夏より夜明けが遅いからと起床時刻を遅らしたこともあり、冬至の頃は夜が明けきらず、眠いより寒くなかなか起きてきません。養護学校に登校する時刻に間に合うように起こさねばなりません。子どもにも先生にも三期はつらい朝を迎えています。

寒さで身体の動きが鈍くなります。なかには脳炎の後遺症で運動マヒのでている人もいます。手足が不自由になり、寒さから身をかばって一層動きが鈍くなります。そのため血行が悪くなりマヒの手足が凍傷になるのです。また、子どもは誰でも水遊びが好きです。殆ど陽光の季節のできごとですが、重度の人の中には暑さ寒さ関係なく水遊びが好きながります。先生の目をぬすんで手足を水でびしょびしょに濡らし、喜々として楽しんでいきます。その手足は青黒く冷え切っています。寒風に吹かれ、いつの間にか凍傷をつくってしまします。赤むけに崩

れた皮膚は治りにくく、春まで痛い痛いと子どもは泣きます。薬をぬりながら先生は悲しくなります。

寒さに向かって消極的に屁護ばかりでは、子どもの身体を弱くしてしまいます。医療が進んで患者が増えた社会の現象は、寮の中でもあてはまります。私が近江学園に勤めだした二十年代や三十年代には、流感や伝染病に見舞われ、全員がダウンして、全員枕を並べることが年に一、二回ありましたが、この頃は、週のうち医者通いの日が殆どであります。

抵抗力と自律性の弱い重度の人が圧倒的に多い寮の生活では、先ず健康を考慮することが大事です。

子防に勝る治療なしと昔から言われてきました。この考え方を寮の生活の基本方針に取り入れて、日課に組み入れた一つに朝のマラソンがあります。朝の始動が一日を活動的にするからでもあります。

いじけないで、身体を動かし温まれば、血行もよくなり、凍傷にもならんだろう。さあ、ジョギングに励もう。

初めから「ハイ、ハイ」わめき通す子、声を聞かされながら何とか走らそうと付き添う先生は大変だ。「いっちに、いっちに、ハイ、ハイ」と走るリズムに合せてにぎやかに元氣な掛け声が流れる。

励ましの声や挨拶の声が入り交って笑顔で答える子、うなづく顔、走りの輪が一週三〇〇米の運動場や建物をぬってできあがる。コースを三回ぐらい廻ると、身体がホカホカしてくる。走るビッチもあがって軽快になってくる。

冬の初めに、ペソをかき、駄々をこね、先生を困らせていた淳君も、今はしっかりと足どりで走っている。ビュンビュン飛ばして馬力の走り、他を圧倒する穴ちゃんや大ちゃん、そして慶ちゃん、スマートな走りの奈々ちゃん、豆タンクのように突進する藤ちゃん、背中を押さないで止まってしまう和代さんも、声をかければスローテンポながら走るようになった。多弁で一向に足が動かない貴宏君、ペソかきの公ちゃん、真赤な顔で頑張る顔、顔、――。

目につくA棟の小さな一人ひとりの姿に感動があります。はつらつとした明るさが見えてきます。身体が鍛えられるだけでなく、心も鍛えられると思われてなりません。

二月三日(節分の日)に、石部町内五つの施設と学校合同のマラソン大会がありました。五〇〇人が参加して、近江学園の運動場を出発し、西寺から東寺を周回する六kmのコースに挑戦するのです。

ふだん、歩行訓練で歩き慣れている道路ですが、さて走ってみるとかなりの起伏があつて、息を整えリズムカルに走れるものではありません。息づかいが荒くなる足元が乱れて、前に進みません。しんどいからと走りをやめ一服のつもり

年々の思い出が少しでも触発できればと、簡単な寮の沿革と、職員・児童の動向を表してみました。参考にして下さい。



- ▽設立年月日・昭和25年5月1日
- ▽設立者・糸賀一雄
- ▽設立功労者・吉田ナミ
- ▽昭和25年5月1日・児童福祉法による精神薄弱児施設の認可をうけ開寮、近江学園の重度児14名が寮に措置変更され、職員7名と共に寮の生活が始まる。
- ▽昭和25年5月3日・初代寮長斉藤謙蔵死去。夫人の斉藤ちか、亡夫の遺志を継ぎ二代目寮長に就任。
- ▽昭和26年11月15日・天皇陛下近江学園に行幸されたおり、落穂寮児のリズムバンド演奏をご覧になって大変感動された。
- ▽昭和27年12月31日・公費補助金の助成をうけ別館(南寮)を建築、定員30名の受け入れ可能となる。
- ▽昭和29年5月10日・風呂場・調理場の増改築が行われた。風呂は五右衛門風呂で板を底に沈めて入るのだが、尻に

- やけどした者がいた。
- ▽昭和30年3月8日・東京渋谷の東横百貨店で落穂寮児の絵の展覧会が開催される。13日迄6日間の開催期間中連日大盛況で、来場者感激させた。ラジオ・NHKテレビ・日本テレビにも紹介され秩父宮妃殿下・徳川正子さんのご来臨があった。
- ▽昭和30年5月10日・展覧会で大変な反響をよんだ寮児の絵が、美術の専門誌「美術手帖」の特集号として発行される。
- ▽昭和30年10月30日・法定年令(18歳)を超過者を引き続き生活させるための成人寮を新設。定員は20名。
- ▽昭和31年11月1日・保健衛生の重要性から医務室が成人寮に増設される。
- ▽昭和33年10月1日・第一回秋季親子合同運動会開催。トラック一周25mに満たない山の上にある小さな運動場であった。
- ▽昭和34年3月31日・旧館三棟を壊し、跡地に新児童棟本館と事務所・調理・浴室を含んだ管理棟を建設。児童の定員が50名となる。
- ▽昭和34年12月1日・隣接の谷を借り開墾して養鶏を始める(43年まで続く)。二千羽まで飼育数をのぼし大いにもうける魂胆は残敗に終わるも、この間に養われた落穂寮の土性骨は今も続いている。
- ▽昭和35年10月1日・滋賀県下第一回施設合同運動会開催さる。当時は8施設だった。
- ▽昭和36〜37年・基礎的な生活習慣を身につけた中学年令の者は、作業指導を受けるため信楽学園や一麦寮へ移っていった。又、養鶏作業で鍛えられ就職もしていった。

- ▽昭和40年6月1日・増田正司三代目寮長に就任。前寮長斉藤ちかは家族舎に隠居(昭和53年10月死去)。
- ▽昭和43年5月1日・背後に山が迫り隣りも山に狭まれた敷地内に建物がつしり並んで、もうこれ以上の建築は不可能であった。しかし県内からの入所希望者が更に増加すると見込まれ、県行政指導により他への移転計画を検討する。
- ▽昭和45年5月1日・現在地石部町大字東寺に施設整備事業完成、移転する。定員80名となり、寮内に小・中学校の分校として教室が設けられ、学籍児は学校教員により初めて義務教育の授業を受けることになった。
- ▽昭和46年7月25日・待望の自前のプール完成、子どもと親と職員の汗の結晶である。
- ▽昭和47年2月3日・石部地区施設合同耐寒マラソン大会が催される。毎年節分の日に実施される。
- ▽昭和47年4月7日・常陸宮殿下・華子妃殿下ご夫妻石部の施設をご視察される。落穂寮は全員運動場にてリズムバンド演奏でお迎えする。
- ▽昭和47年11月5日・第一回同窓会石部

- の落穂寮で開催する。退職員・寮児共々の同窓会として毎年秋に催される。
- ▽昭和49年3月31日・学校の授業をするにも教室がなくて不自由していたので、四教室の学習棟を建てる。
- ▽昭和49年9月1日・一麦寮の更生施設変更により、一麦寮の学籍児4名、措置変更で落穂寮へ。寮の20才以上の成人になった者4名が一麦寮へ入所。又、4名が八日市養護学校へ転校のため退寮していく。
- ▽昭和50年3月31日・児童居室と食堂にセントラルヒーティング方式の暖房を設備する。子どもたち大喜び。
- ▽昭和52年11月3日・第六回同窓会を催すが、マンネリ化して参加者も少なくなり、以後休止となる。
- ▽昭和53年4月6日・保母宿舍2階建て新築、2人合部屋から1人部屋(6畳間)となる。
- ▽昭和53年4月30日・湖西地域出身で成人に達した者は更生施設藤美寮へ入所するため退寮する。
- ▽昭和53年7月17日・寮児7名と職員5名、一泊二日で富士登山。日頃の鍛練の成果でゆっくりと全員登頂成功する。
- ▽昭和54年2月1日・隣接の甲西町大字柑子袋に県立三雲養護学校が建設され、学籍児が通学することになる。
- ▽昭和54年8月20日・寮児の作った土偶やお面の作品展示即売会を銀座の明治画廊で一週間開催(第一回東京展)。沢山の来場者感動さす。以後毎年この時期に催す。
- ▽昭和55年3月31日・保母の増員にとも

“日課の様子”



A棟の今日・明日

指導員 本田 憲生

A棟の特色は全員が学籍児童、生徒二十四名、職員八名の組織で、年令は子供が六才から十六才、大人は二十才から四十五才と両者共的の絞り様のない感じもするが、仲々元気で楽しい現場である事、それと伸び盛りの子供達ばかりであるので、とても明るい集団である事、これが一番いいと感じている。この明るさは、きっと、あの人達が創造してくれているのだと強く感心させられている。

棟全体の一日の生活の出来、不出来は朝、出勤時の足音と玄関に立った時のその人の顔、それを迎える子供達の顔で決まる。おもしろいのは子供達が職員を迎える、その仕草が淡白なものから、熱狂的に濃厚な表現まで、その大人をよく表している。単的にいうと、期待されている職員とそれ程ではない職員とがあるという反省が生まれてくる。時間がなくとも、才能がなくともやれる最も完成された影響力、指導力として「顔色施」のお話を故糸賀先生からお聞きした事があった。これが指導に先立つ人間関係の基盤だろうと思う。

A棟の指導の中心は身辺自立の為の生活指導であるが、これに弾みをつける方

法として、早朝マラソンに力を入れていく。一年二年と経って、このところ漸約軌道に乗りかけた観がある。A棟全体が一丸となって、同一目的に向かつて行ける様になって来たからである。

新陳代謝を盛んにすると同時に、大いに機能訓練に役立つ。手足口の協応作用の強化が言語指導に生きてくる。体軸の定まらなかつた児童が脊柱を伸ばし、両足の相方に体重をかけて立つ、運動時の姿勢と静止時の姿勢の制御力が増してくれば、これに従って、言語の発生と発達も期待できるし、構音障害の改善にも欠かせない。能動性の言語にしても、受動性の言語にしても、確かな手応えとして伝わってくる様である。歩く時には歩くに適した一定のリズムと声掛け、走る時には走るに適した一定のリズムと声掛け、これが重要な決め手である。トレーニング中は声掛けを連続し、それによって呼吸を調整していく、これによって音韻の発生呼吸を獲得していく試みである。又、排気量の多い音韻で掛け声を続ける事で麻痺のある児童にとっては言語運動のリズムと呼吸の関係を体得させていき、多排気量言語を明瞭にしていくと考えている。

よりよい体形をつくる事、それだけでも健康に繋がるので大切に指導していき

たい。これは単なる“走る”運動と見ずに児童の表現活動を豊かにするトレーニングであると考えている。これに小運動系のトレーニングを組み合わせて実施している。これ等の指導で身体全体のバランスを良くし、体力の増進を積んで、これからは野外活動も盛んにしていきたい。

この様に考え、A棟では、よく食べよく動きよく眠る〇そしてよく排泄する。この四原則を基に、時間があれば戸外で活動する事にしている。

「寒来寒楽、暑来暑楽……」と。

一路薄頭二到る

指導員 山下 陽一

〈薄頭〉

冒頭のタイトル、実は「一路・白頭・二到る」と書きます。これは一心不乱にその道を究めてとうとう白髪の年令になったということを述べたものだと思います。

ところが私の薄頭はこれとはまったく違った意味に使います。すなわち、自分としてはそれほど年令になつていゝとは思えないのに頭が次第に薄くなつてきていゝ。しゃくにさわることだがしかたがないとアキラメがつかない歳でもありません。考えてみればこの仕事を始めて十三年も目も終わろうとしていゝものにもかかわらず、以前と同様、同じことを繰り返していて判断に迷う日々の連続です。一般企業で十年もするとそれなりに自信ができたり、仕事へのおもしろ味も湧いてくるところなのでしようが、私達の仕事は子どもを育てていくのと同じようなもの

らしく、何年しても心配したり手を焼いたり(時には嬉しいこともあります)することが絶えないのです。そもそもこれが「薄頭二到る」原因だ、などとは言いませんが、私達の日々の指導が果たして子どもに似合ったものなのかどうか、いつも考えさせられます。

〈寮の日々〉

業務日誌では「日課」ということばを使っていますが、日中は何をしているのか、皆さんは思いのほかご承知ない方が多いと思いますので簡単に述べます。私の班では寮生六人、男子指導員二人で他のグループより人員配置の点で恵まれています。日課の内容は主に粘土作品の制作、地域の老人クラブの人達と合同での畑作、寮内作業などとなっています。たとえばどんな様子なのかといいますと、玉ネギ収穫後の作業は次のような仕事をします。はさみが使える森川君は束を結びビニールひもを一定の長さに切る作業、野々村、小森の両君は白玉ネギを四個ずつ持つてきます。職員が結わえ付け束になつたものを中西、米田、小崎の三君が他の場所へ運びます。しかし、他の仕事もこんな具合にうまく分けられるとは限りませんが、みんなそれぞれの役目を十分果たせるような仕事を見付けたいものだと考えています。

〈日課の今後〉

落穂寮は児童施設なので青年期に達した人達の指導の経験が浅く、何かにつけとつおいつしております。今年度内に一

定した作業に取り組みたいと思っております。去年より父兄の皆さんに何かいい仕事をとお願ひしました。職安も訪ねました。しかし、かなり厳しい模様でした。彦根の作業所ではコンクリートビスの組み合わせに取り組んでいました。作業所では仕事を得るのに血まなこの様子です。真に仕事は死活の問題だというわけです。私達もあんのんとしているわけにはいかなくなってきている様です。又、一路薄頭二到ルになってしまいうです。

年長日課グループ

指導員中 嶋 貴一郎

年長児のほとんどの人達は重度の人達であり、就職あるいは実習、家庭への復帰が困難な状況に置かれている。そのため、養護学校の中学部や高等部卒業後も寮内で職業訓練的な指導や作業指導を受けている。

女子の作業日課のグループは、三グループに分かれており、それぞれ能力等によって、「松組」「竹組」「梅組」に分かれている。

「松組」は、重度ではあるが、寮内では高い生活能力を持った人達のグループで、主に寮内の子供達の衣類等の洗濯や裁縫を、日常の学習として取り組んでいる。

「梅組」は、最重度の人達(ほとんどの方が二十才を越えているが)であり、日常の生活においてもまだまだ未自立な部分が多く残っている人達のグループで、

職業訓練的な指導がむづかしい状況であり、体力強化や、生活指導的な要素に重点が置かれている。日常的な学習として歩行を兼ねて町内の空缶を拾い環境美化に協力している。又、寮内にあつては一輪車を使つての土木作業に取り組んでいる。

「松組」と「梅組」の中間的な立場に位置する「竹組」は、生活能力的にはほぼ自立しているが、学習能力や理解力等においてはまだまだ弱さの見える人達のグループである。この「竹組」の人達は、体力的には強い要素を持っているが、手先を使つた細かい仕事には弱いところを持っている。この点は他の寮生にも共通するところであるが、寮内の年長日課

の中に粘土による造形活動がある。これも手先の強化をねらいの一つとしているが、「竹組」については残念ながら創造性の点で粘土による造形活動がむづかしい状態にある。そこで「竹組」の学習内容に木工、焼板作業を取り入れた。木をペーパーでみがいたり、焼いた板をタワシでみがいたりする作業である。最初のころは単純な仕事であるにもかかわらず、やり方がわからない等で遊んでいる寮生も多かったが、最近では女性特有のじつくりと細かい仕事をするという特性もあつてか、よく指先が動く様になって来ている。次の段階を言えば、自分一人で何らかの製品を造り出してくればと思うが、

残念ながら「竹組」には、そこまでの総合能力を持った人はまだ出て来てはいない。

年長日課グループの人達は、近年ますます

重度、最重度化して来ており、従来通りの作業内容が組みにくい状況に來ている。今後、重度化傾向が強まって來る中で、重度、最重度の人達の作業指導の強化、確立を生活面等総合的な面から考えていかねばならないと思われる。

洗濯日課について

指導員高 松 千代

洗濯班はC棟の女子五名で、構成されています。C棟とは年長女子の棟で、朝は六時三十分起床、朝礼の後寮内マラソンに出ます。いっしょけんめい走る人、だらだら走る人、歩いている人、さまざまです。マラソン後、着替えて掃除をして朝食です。女子棟は肥満気味の人が多く、昼、夕食は制限されますが、朝食は自由なのでとても嬉しそうにたくさんおかわりをします。朝食後、排便。一日活動するためにはとても大切な時間です。九時三十分日課が始まります。

洗濯班は松組と呼ばれていて、他に梅組(空缶拾い歩行)、竹組(木工など)、杉組(外作業、粘土など)があり、それぞれの組に寮生達が分かれていきます。

松組の主な仕事は、各棟の洗濯物を洗って干すことです。干すといっても洗濯物の量に対して干す場所と竿が少ないので、干せなかった分は乾燥機で乾かします。周辺の掃除は主にはき掃除で、階段やお風呂場前をきれいにはいて行きます。下着やくつ下や風呂場マットは手洗いでないと汚れが落ちません。そんな時、手洗いが大好きな人が自分の欲求も満足さ

せつつ頑張っています。

午前中に洗濯や掃除を終えてしまつと、午後からは裁縫をします。今年は最初の半年程かかって寮のマイクロバスのイスカバーを作りました。職員がミシンで縫った部分もありますが、大半は寮生達だけで縫い上げられ、とても良いカバーが出来ました。普段はホールや廊下を掃除する時に使う、からぶき用の雑布を縫っています。古い毛布を切って合わせて縫うだけですが、意外に難しく簡単に作つてしまふ寮生に感心することがあります。糸通しがなかなかうまくならない人、糸通しができても縫い目が荒い人、気分が集中しにくい人、様々ですが少しづつ進歩しています。

洗濯班は三時で日課終了です。そして棟に帰つておやつを食べます。生活クラスに帰ると、日課時間には出来なかった自分の好きな事ができます。カセットの前でアツアツ、じゅうたんの上でポロ。職員をからかいて來る人もいます。日課時間では緊張し、生活時間でリラックスする、寮生達はちゃんと区別している様です。



よろしくお願ひします

新 任 職 員



菅 原 龍 弥

昨年の春よりA棟の指導員の任に着いております。就職一年目、指導員という名が自分にとって全く恥ずかしいままに早や一年が過ぎようとしています。埼玉県浦和市に生まれ育ち、埼玉県の文教大学教育学部を卒業（佐藤先生は大学の一年先輩です）した生粋のグサイタマ男であります。大学時代より施設ボランティアとして精神薄弱児施設「岩槻学園」に毎週日曜日に通う生活をしていました。それがいつしか漠然と「施設で働きたいなあ」と思うようになったきっかけだと思います。実際、教員採用試験にも、進学しようと思った学校にも落ち、「果報は寝て待つ」ていたのが、大学のゼミの先輩であった一麦寮の片山先生に紹介して頂いた落穂寮でした。自分の中で何となく「施設」というものにこだわりを持っていった結果かなあと思うと大変嬉しかったです。それにしても運の良い、人の縁に恵まれた男だと我れながら感心しています。

こうして落穂寮に勤め始めたわけですが、私がこの仕事を選んだのは「子どもたちといると楽しい」といった理由からであると思います。しかし仕事として給料をもらっているということは、それだけではいけないのです。こんなことを書く、「お前は今頃そんなことがわかっ

たのか」とたしなめられそうですが、本当に最近わかってきたような気がします。一年を過ぎようとして「はて、私は一体何をしていたのだろう……。子どものことを殆ど知らないなあ」と痛感しています。作業指導も十分にできず、生活指導も十分でないといった、いつまでも育たない自分に、もどかしさと不安と、勉強不足の怠惰さに恥ずかしさと後悔と腹立たしさを感じるこの頃です。といって毎日うちひしがれているわけでもなく、生来の陽気さと呑気さはなかなか捨てられそうにもありません。



新 保 智 子

私がここ落穂寮に勤めさせて頂いてから、早や一年近く過ぎようとしております。この一年間の間に、私にとって「心の事件」なるものがありました。自分の中で、「新しい発見」なるものもたくさんありました。

私は新潟の長岡で生まれ育ちました。きつと今頃は、また新しい雪ですっぽりと埋もれていることでしょう。

「故郷は？」と聞かれて、「新潟です。」と答えると、決まって「田舎なんだね」と相手の方から言われます。ですが、私の故郷の名誉（？）の為に、一つ言わせて頂くなら、決して新潟は陸の孤島ではありません。とても風情のある素敵なおとろだと、自分では思っております。

高校時代、クラブでボランティア活動をしてきた友人について一緒に施設を訪問した時のことです。その施設に足を踏み入れたのが、保母としてやっていきたいと思っただけでもそのきっかけであったと思います。

そこは養護施設でしたが、子供達の中で一緒に過している間に、私の中の何か心が動かしただけでした。

以来、何かにつけ、病みつき（？）になり、施設の訪問に行ったりしておりましたが、残念ながら精神薄弱施設は身近な所になく、私の中では「無」に等しいほど遠い存在であったわけです。

それが、短大を経て、就職課の方より「一度行ってみないか？」と紹介されたのが落穂寮だったわけです。

今思えば、たったの三日間の実習だったわけですが、違和感不思議なことには感じなかった様に思います。両親は反対しておりましたが、私の意志をくんでくれ、承知してくれています。

私の近況と言いますと、最近では刺しゅうやジグソーパズルなどの細かいものに挑戦しており、その細かさに半分イライラしながら、気分を発散させているといったところでしょうか。

私自身、まだまだ未開拓地の部分が多過ぎて戸惑っている状態ですが、それに流されてしまわない様、自分というものだけはしっかりと持って、自分の中にボランティアの気持ちを取り入れながら、マイペースでやっていきたいと思っております。



嶋田奈緒美

落穂寮で生活して、早や一年が過ぎようとしています。昨年のお正月頃、就職先を探していた私が、学校の先生にこの落穂寮を紹介され面接に来ました。そして、寮長先生と長い時間お話をさせていただき、「ここで生活したい」という気持ちで一杯になり、採用していただくことになりました。

私がこのような施設で働きたいと思ったのは、小学六年生の頃でした。その頃、よくテレビで施設の様子などが放送されているのを見て、何か心打たれるものがあり、「私も何か手伝いたい」と思いついて、将来はそういう仕事に就こうと思っていました。

しかし、高校から専門学校に進む時、このような考えを両親に話すと、猛反対されました。あのようには大変な仕事は、私なんかには勤まらないと言ったのです。このことで何度も喧嘩をし、それで一応私が折れて「保育所の保母になる」ということで専門学校に行けるようになりました。

それでも、私の夢を捨ててしまったわけではありません。専門学校で二年間で私にだってできるというところを、実際に示さなくてはいけないと思ひ、夏休み、冬休み、春休みなどの長期の休みには第一びわこ学園へアルバイトに行きました。

このことが良かったのか、最終的には両親の方が折れて、私の希望通りの道に進むことができました。

「子どものためなら、どんなことでもできる保母になりたい」「子どもたちを指導する中で、自分自身も子どもたちからいろんなことを学びたい」「こんなことを思っただけで就職したのに、実際の私はどう思うと、こんな思いはどこかに消え、気がつけば子どもを叱りつけていたり、私の考えを一方的に子どもに押しつけたら、という状態です。」「こんなことではない」「こんなことをしたかたんじやない」と思い、自分の態度を改めようという度にも思ったのですが、子どもの中に入るともう余裕がなくなってしまう、ついつい叱ってしまいます。」「私には、この仕事は向いていないのではないかと、真剣に悩んだ時もありましたが、悩んでクヨクヨしていても仕方がないので、一杯やっていくしかないと思って過してきました。

しかし、最近、何年もこの仕事に就いておられる先生方を見ていて、大切なことを忘れてしまっていた自分に気がつきました。それは、子どもと同じ位置で子どもたちを見ることがあります。私は、子どもの上に立ち、上から一方的に指示してきただけのよう気がします。今まで一生懸命やってきたつもりだったけれども、一番大切なことを忘れていました。何か恥ずかしい気がします。

この一年、私は、学籍児二十四人のいるA棟で過ごしてきました。一年間は初めてのことがばかりで、何もわからないま

ま過ぎてしまったように感じます。最近、子どものことをじっくり考え、「こんなことをしてあげたい」「この子とこんなことをしたい」ということが考えられるようになってきました。これからは、本当に「子どものためならどんなことでもできる保母」になれるように努力し、子どもたちからいろんなことを学んでいきたいと思ひます。



市瀬由香

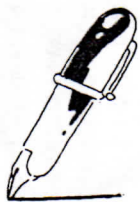
早いもので、落穂寮に就職して、もうすぐ一年になろうとしています。

出身は京都で、京都保育専門学校の二回生の時に、落穂寮に実習に来させていただきました。その実習がとっても心に残るものとなりました。A棟のみつばち組で実習させていただいた私は、林明史君という一人の男の子と出会いました。

大きな発作を持っていて、じっとしているということが全くないので、片時も目が離せませんでした。でも、一緒にいることが、だんだんと嬉しくて仕方なくなりました。約二週間の実習が終わわり、又、明史君に会いたいという気持ちで、落穂寮に就職したいと思うようになったきっかけです。寮長先生にお願いして、採用していただけるということが決まった時は、本当に嬉しかったのです。京都に就職することを望んでいた両親も、決まった時は「精一杯頑張るように」と励まして

くれました。自分の思いどおりの道へ進むなんて、これ以上の幸せはないと思ひました。そして、いよいよ落穂寮の職員となり、実習の時と同じA棟に配属が決まりました。私はくま組で、山際正己君、松井大輔君、藍原通宏君、穴山秋男君の担任となりました。間もなく一年になろうとしているのに、この四人の子供達のことを、何一つわかってあげられていないような気がします。こちらの気持ちを押しつけて叱ってばかり。年令もA棟では大きな方で、良い事悪い事の区別もついているので、何か悪いことをするとどうしても叱ることしかできません。何一つわかってあげられていないのに、叱るだけ叱るなんて、間違っているなあいつも反省しています。四月からは担任する子供が変わりますが、又、今の四人の子供たちを持ちたいなあという気持ちで一杯です。そしていつか明史君の担任となるのが、私の大きな希望です。

一年目は、無我夢中で過ごしてきましたが、二年目はもう少し余裕を持って、子供達の心をわかってあげられるようにより一層、努力していきたいと思ひます。



吉川 真佐栄

(旧姓 椋本)

先日の同窓会に御出席のなかつた旧職員の方、卒園生の皆さん、お元気でしようか。恒例の行事の同窓会も、もう十一回と回を重ねております。毎年十月頃になりますと、ポチポチ通知の届く頃と気持ちもソワソワ、ウキウキ……。でもなかなか思う様に出席させて頂けません。今回は運良く出席させて頂く事が出来、一日楽しませて頂きました。寮の庭のイチヨウの葉も黄色く色づき、秋晴れに恵まれ、現職員の先生方の手作りのおもてなし、お寿司、麺類、コーヒー、わた菓子と盛り沢山。交通の便が悪いからと草津や石部駅までの出迎えまで受けました。増田寮長先生、池谷先生、奥様、皆様、お元気で昔とちつともお変わりなく、タイムマシーンで若き日の自分に戻れた様ではしゃいできました。あざみ寮信楽寮、その他の寮からも寮生さん達が元気な顔を見せてくれました。銀林進君、山田はつ代ちゃん、アニキ、安部さん、中村新一郎君。久々に出会った山本一士君、荻田茂君、田中秀男君、勝見君、津田義夫君、皆んな、良い青年に成長してくれていました。しっかり働いている様子、嬉しくなりました。「先生、僕、大きくなったら、働いて、先生に指輪買つたるわな。……そんな事を言っていた幼い頃を思い浮かべました。「誰かわかる？」と十何年も経た、よいオバサンになった私の顔を指さし尋ねると、銀林君「ムクモトセンセイや」。覚えていてくれるじゃありませんか、チョッピリ嬉

しい気分です。「僕も結婚したいなあ。」働いても、なかなか給料増えへんわ」「飛行機で九州へ旅行に行つて来たよ。……色々な話を聞いて来ました。今年○○先生は来られてなかつたネ。○○先生、一回会つた切りで、どうしているかしら？等々、皆んなやはり心待ちにしております。次回はきっと、もっと沢山の先生方、同窓生の皆さんにお会い出来る事を楽しみにしています。待ちわびて下さる寮長先生、落穂寮の先生方がいて下さい。立派になつた石部の落穂寮を見に来て下さい。では、来年お会い出来るのを楽しみに

同窓の便り

しています。寒くなります。お身体大切に。(46・1・31 退職)

ぼくはいっしょうけんめいがんばつてしごとをしています。

安部 貞治

11月3日の同窓会にいきましたら、かすみ君と中村新一郎君も津田君もでありました。

寮のたいいくかんの入口の中になんごうのときのしゃしんをみました。

ひるはてんぷらうどん、おすしをたべてコーヒーをのみました。そしてたいいくかんの中でみんなの中ですわつていま

した。そして三時まえごろおわりまえにまつだ先生からはなしを頂きました。そして三時半すぎにマイクロバスにのり草津えきまでおくつてもらい草津からでんしゃでかえりました。本とうにうれしかったです。(44・4・6 退寮)

森田のぶ

先日は色々とお世話様でございました。会場の飾り付けや準備やらで、職員の皆様は大変でした。運動会、クリスマスパーティーなどの飾り付けなど、来賓の人々、何時も落穂寮はすばらしい

と感心しております。

本当に有り難うございました。私は、

井戸の中の蛙同然、この東寺で生まれ育つて一生をこの東寺で終わる事でしょう。四十五年の五月、縁あって落穂寮にお世話になって、五十七年の三月迄約十二年間、気まま者の私の事として色々な事がありましたが、こうした同窓会にお招き頂いて、色々な人にお会いできて、お名前はすぐ思い出せない人も沢山ありましたが、大変懐かしく過ごさせて貰いました。以前は国民年金も何もかけていなかったのですが、落穂寮にお世話になつたお陰で今年の六月分から年金が頂ける様になりました。感謝しております。

元気で居ります限り、落穂寮へよせて頂く事を楽しみにしております。有り難うございました。末筆ながら皆様お元気で。(57・3・31 退職)

松田 百合

(旧姓 内林)

退職以来、この十一月三日の同窓会には出席させて頂いていますが、毎年、前日までとても寒かったり、雨という日も、必ず暖かな気持ちのいい日になっています。そんな中で現職員の皆さんの心からのもてなしを受け、懐かしい落穂の味を楽しませてもらい、会いたいなあと思つていても、めつたに出会えない人達、そして、卒園していった元気な笑顔の子供達、たつた三、四年ではありましたが、共に働き語り合つた人達との落穂寮での生活は、私にとって財産であり、宝でもあります。その年に一度の同窓会は懐かしさでアツという間に過ぎてしまします。

しかし、掃毛する時はいつも別れる淋しさもありますが、それより現職員さんのいきいきとした活気ある姿を見て、私までが落穂にいた頃の気持ちになり、若若しく元気な気分になつて居るのです。そして、もう今から来年の同窓会を楽しみにしています。(57・3・31 退職)

高井 正義

私は学校を卒業した昭和三十一年四月から、昭和三十三年十一月までの僅か二年七ヶ月の短い期間でありましたが、当

時、石山南郷町に所在していた落穂寮に就労していました。

落穂寮の同窓会が開始されて、今回で第十一回目になりますが、内容が格式張らず肩が凝らない。気楽である。雰囲気がか家庭的で何かほのぼのとした温かさ、和やかさが感じられることに心をひかれ、皆出席している一人です。

これまでは中庭、食堂を中心に分散されて開催されていましたが、今回は体育館を中心に催され、参加者が一堂に会して在職、在園時代を語り合う場が設定され、年代毎に当時を振り返って話題が広がり、楽しい思いで聞かせて頂きました。私も、ツルハシとスコップを持っての作業が毎日の日課であった当時を思い出しながら、感想を述べさせて頂きました。

参加者の中で当時の職員としては、現役の増田寮長先生、池谷先生、現在は滋賀保護院の寮母をしてられる田中光代先生の三名のみでしたが、退園者の中には、川崎恵三君、広田(旧姓上坂)八重子さん、橋本徳治君、小島栄一君、荒堀しかさん、守山美代子さん、増田隆俊君、北川博君、森野聡君、銀林進君等、同時に生活を共にした人達と出会うことが出来、懐かしい気持ちで当時を想い起こしておりました。退園者の人達の中には、就労している人、結婚した人もありましたが、八名の人々が現在も成人施設等で生活しており、どの顔を見ても当時の面影はありますが、白髪の増えた人、顔のシワが目立つ人、言動が緩慢に感じる人等、この人達の将来処遇の厳しさと年代を感じずにはおれませんでした。しかし、こ

れらの人達の中で、私の顔を見て素知らぬ態度を示す人は一人もなく、ニコッとする人、片言や手振りて話しかける人、近況を細かく話す人等、様々の状態の中で反応が見られたことは大きな喜びでした。そして、長い空白の期間があっても、同じ釜の飯を食べた者は、お互いが顔を合わせて接触を持てば親近感も湧き、心の通い合いの出来ることが人間であることを実感として味わいながら、心が和やむことでした。

何らかの理由で今回、出席されなかった退職者、退園者の皆さん、次の機会には是非共参加され、同窓関係者の親密な基盤の中で今後の落穂寮の発展を願おうではありませんか。

(33・11・1 退職)

中江 甲子生

秋の空澄み菊の香高く、今日の佳き日を弄ぐ落穂寮の同窓会。いつもの身なりと違つて背広姿に少々肩が凝った。それも落穂教室に二年間ご厄介になつただけで、卒園生の方々はあまり知らないせいもあつたであろうか。でも、職員の方々の工夫をこらされた催しにお邪魔して、チケットでお菓子やうどん、すしを、そして一服吸いながら好きなコーヒーを飲む味も、店で飲むコーヒーとは一味違つておいしかった。そこへひよっこり木田君が現れて、「こんにちは」と言つて話しかけてくれた。そしてなんてんの人達とおしゃべり、木村浩子さんのお母さんにも、浩子さんにも、落穂教室当時の保母さんにも出会つて、思いは五十二、

三年頃になった。

この年が印象深い。同じ釜のめしを食べて暮らすことは、人生のうち数少ないが、ぼくににとっては寄宿舎生活と軍隊生活と落穂寮である。何といつても一番楽しく張りのあつたのは、言わずもがなである。それらも子どものために夜の更けるのも忘れて施設行事の準備に没頭し、家族的な雰囲気、心の交流があつたためである。

落穂寮でぼくは、「大きなものから小さなものまで動かす力は……」のコーナーシャルのように、重油で底力を出し、タフなジール機械を目ざす人間造り。

「おはようからおやすみまで暮らしを見つめる……」のように、生活の一つひとつをきめ細かく見つめ進めていく生活習慣造り。「〇〇をかえ、〇〇もかえた。そしてわたしも変わった」のように、常に工夫をこらし新鮮さを求める心配りを学ばせてもらった。

養護学校在職して十年目を迎えるのに、どれだけやってきたのかと思ひ返すと、年のせいもあつたか、裏道の階段があぶなつかしかった。

中井 千明

(旧姓 杉田)

何ヶ月ぶりの落穂……。

先日行われました同窓会に、ソワソワして出掛けていった私です。私が落穂を去つて早や七ヶ月。去年までは、同窓の皆様を迎えていたのに、今年は現職員の方々に暖かく迎えて頂き、本当にありがとうございました。

残留の子供、現職員の皆様、そして今

は同窓となった懐かしい先生、子供達を見て、私の落穂での四年間の思い出が胸一杯にこみあげてきました。特に体育館に飾られていた写真パネルは、「田川の夕一チャンと手をつないでよく散歩に行つたな」とか、「吉田のさとみちゃんとパンの話や」「ハメハメハ大王」をよく歌つたな」とか——思い出されてきました。そして、ついこの間まで一緒だった、あつくん、たかしちゃん、チャミくん、よつちゃん、いつちゃん——、みんなみんな自分の子供のように可愛くて仕方なかった頃が随分昔のように思えてきました。

この四月より、結婚の為信楽に戻り、現在信楽青年寮に勤めている私ですが、この七月に落穂を退寮した太田浩一君が同じ青年寮にいます。三日の同窓会には青年寮の行事で参加できなかったのですが、少し彼の事を話させて頂きますと太田君は、彼が本来持っている明るさとユニークさで、青年寮でも人気者になっています。入寮当初は、落穂での生活とはかなり違い、本人も戸惑っていたようですが、今では青年寮での生活にも慣れ、マイペースで頑張っています。作業場の方でも調味料入れや箸置きなどを粘土で上手に造っているとのこと。とにかく、みんなに可愛がられている太田君ですので、御安心下さい。

今回の同窓会には、是非、太田君と一緒に参加させて頂きますので、よろしくお願ひします。最後になりましたが、この同窓会を盛り上げて頂いた先生方、本当にありがとうございました。

(60・3・31 退職)

「むかし」を訪ねる

(40・8・31退職)

田 中 光 代

その日の生活に追われて、昨日のことを思い出している暇もない筈なのに、偶に迂り込んでくる記憶、それが最初に勤めた石山南郷の風景であり、仲間であり、大勢の子供達のことである。

今年の五月初め、当時共に働いたY嬢と、ふらりとバスに乗り、南郷へと向かった。「何処で降りるの、停留所名が変わってるわよ」吊り皮にぶら下がりながら前方を覗んでいた。「立木……」と聞いてバタ／＼と降りた。元、近江学園前に向かい、坂道を見上げたが、この坂は変わりなく見えた。ゆっくり、足裏で土やコロ石を味わうように上る。

学園舎がどのように建っていたかは定かでない、今は叢が金網に囲まれているのみ。壊れかけた三つの建物が黙ってポツンと立ち、その向こうは雑木があり、畑が連なっていた。

表札のある家を見たので近寄ってみると、元園長H先生の家だ。囲りに家影がないから、淋しいだろうなあとと思う。

一麦寮に行こうと、反対側の坂道を探したが、金網にさえぎられているだけでなく、ただもう樹木がうっそうとしていて、皆目判らない。仕方なく、上って来た表坂をまた降りた。

裏坂はこの辺りだったと見当はついたが、その登り口もわざと潰したか、やはり雑木に覆われていた。赤錆びた山水が入口辺りを濡らしている。

一麦寮への坂を期待して道を一曲りしたが、Y嬢と私は、近代的な公団住宅の一群と、前方のバス停のモダンに改装された回路に啞然とした。バス停は「新浜」となっている。そうだった、この名前が元々の呼び名だったと納得する。

落穂寮は変わらずにあった。と、何かホッとすることも感じながら近付いたが、寮舎は、かろうじて建っている、というだけで、正に廃虚であった。

二人はおそろおそろ、言葉など上すべりになりながら近寄った。「ここ、玄関？」「ん、炊事場？」「え、その隣り？」石段も草やゴミでまともに登り難い。中までとても行けない。仕方なしに前の道をウロ／＼する。ホールを見上げる。屋根が波打ち、一撃あれば、スローモーションの一場面を想像できるような、あの崩壊が起きそうだ。下の窓には雑草が這い上がっていた。あの組、あの部屋、等等、話は自然に口を突いて出る。それ、前の畑が、あの頃(昭和三十年代)と変わらぬ肥の臭いを漂わせている。Mさんの家は少しも変わっていないように見えたが、牛を飼っていたN家の立派なことが、バスターミナルや、公団住宅への道の整地で用地を何とかされたのかも、と話し合ったが――。

もらってから鹿跳まで歩いた。脇を車がビューンと怖い程のスピードで抜けて行った。蛙岩の辺り、立木さんの辺り、二人はこもこもの想いを胸にしつつ、時に声に出しつつ歩いた。途中でY嬢が溝に蛇を見て驚きの声を上げたが、それすら無性に懐しく、嬉しくてならなかった。

鹿跳橋の向うも、あ、山がない、と目を見張るばかりに住宅地になっていた。橋たもとの洒落た食堂で一服して、この店もなかったのと思う。奇岩を縫って流れる川の、そこだけ広くなった川原には、連休利用の釣人が群れていた。

帰りはバスで石山駅に戻ったが、落穂寮々舎を一瞬に過ぎながら、子供の声、鶏の声、牛のどかな声が同時に、耳奥に聞こえたような気がした。荒れたなあ、それだけ年月が過ぎてしまったのだなあ、と改めて思った。そういえば、何年前か前私一人で大日山に登ってみたことがあった。散歩に常時来ている時には確かに道があったのに、その時は熊笹が道を覆い隠し、往復に時間がかかって、帰宅して靴下を脱いだら、スカートで行ったせいもあるけれど、何と擦り傷だらけだったことだ。熊笹の奴だ。人が行かない、住まない所というものは、てきめんに荒れてしまふ。その証拠を見たようなものである。

混り気のないものだけを心に残して、現在に生きてきたとすれば、と私自身はそう思い、旧地を訪れ、旧友に会う。

囲りは時代に乗り遅れまいと、刻々と小さく様子が変わる。そんな目まぐるしい中で、ふと立寄り、記憶が刻まれる。時折触発されて甦る。年一度の同窓会がそれだろう。

ことに最初の勤務地だった処だけに、脈路は不明になっただけでも、時どきの印象は折にふれて泛び上がったたり、閃光のように走ったりする。記憶が甦るとき、ただ懐かしいばかりでなく、私にとつて人間形成の「いろは」の場とも、時代だったこともあり、当時の心意気に還る元というか、パネの役目がそこにある。

今度の同窓会では、私と同期の先生方は余りに少なかったが、昨日会ったばかりに話し会える不思議を不思議とも思えぬ間柄、何年か会えなくてもそうだと思うが、やはり揃っている方がいいに決まっている。

旧友というからには、それだけ年令も重なった。あの頃の子供達も、柄は子供とは言えないけれど、中身が変わらないのが嬉しい。現在の立場がスツと薄くなる。変な工合だが、それが気心知れた同志だろう。思えば二十年余経つ。

石山南郷辺りは、今後もどん／＼開発されるだろうが、いつかまた、訪ねてみたいと思っている。岩間寺へ、鹿跳からマラソンコースの峠へ、田上山へ……。立木山への石段は、そのうち、杖が要るようになるかも。残された地図がどれだけあるか、心許ない限りではあるが――。

「温故知新」

— 思い出ばなしで —

スミマセン —

武藤 敬助

私が落穂寮の坂道を初めて登ったのは昭和四十八年四月七日・土曜日。当時石部小学校長で今は故人となられた奥村清夫校長の案内で管理棟内の職員室（現指導員室）に通され、寮・学校職員に紹介されて私の教員生活が始まった。これまで十三年間の教員生活で落穂教室にいたのは一年間だけ。しかし、大学を出て初めての世界。それも親元の神戸を離れての生活だっただけに、見るもの経験するもの全てが印象的だった。身体は細く見るからにひ弱そうな一青年教師。「こんな身体で勤められるのだろうか？」と心配された先輩方々もあったと思うが、案の定、事あるごとに熱を出しそうになったこともしばしば。幸い下宿の関係で直室（現寮長室）にしばらく住まわせていただいたことで、寮の先生方が何かとお世話して下さったので本当に助かったことも何回となくあった。

当時は寮・学校とも行事あることに一体となつて取り組み、時間を忘れて過ごしたことも、またB棟のホールを教室代りにお借りして学習を進めたことも本當に懐かしく思い出される。学校としての設備が皆無の中で寮の先生方と一緒に活動できたことは、今では経験できない貴重なものだった。時には朝の打ち合わせで寮長先生からおこごとをいただくことも

あり、しょんぼりしたこともあったが……。

昭和五十四年、義務制を契機に近江・落穂の施設内から離れて三雲養護学校として名実ともに独立して今日に到っているわけであるが、「施設提携養護学校」としての役割をどう担っていくのか、「提携」そのもののあり方をどうとらえているのか等々——施設内ではあまり感じられなかったことが、今日大きな課題となつてきているのは確かである。施設・学校が分離してから色々な面で希薄になつてきたことは事実であるとしても、これまで培われた絆はこれからお互いに支え合つていかなければならないと思う。施設内を経験したものが次第に減つていく中で少しでも役に立てれば幸いである。私自身、同一校に長いというだけであまり役に立っていないが、「古ダヌキ」の良さをできるだけ果たしたいと思う。また機会を見て、寮の皆さんとゆつくり飲んでみたいものである。今後共どうぞよろしく——。

おちほがり

なんてん

なんてん共働サービス

溝口 弘

師走といえども、まだ二十日にもならぬうちから雪が降りました。三時過ぎからの吹雪でアツという間に二十cmの積雪となりました。おかげで塚本君らを草津の現場へ迎えに行く途中、東坂の所でスリップし、また赤い乗用車にあてられて

しまいました。

今朝（十八日）は一面の銀世界で、その雪を蹴つて（いや踏みつけて？）山田康美さんがここにこしながら出てきました。「今日は仕事ありますか、康美はなあ、たぶんないと思うてきたわ、おはよう」と例の早口でまくしたてました。「あんなあ、おちほのクリスマス二十二日やて、おどりやダンスがあるから、仕事になかつたらみんなきてや」「康美は二十日休みか？」「おうちにはなあ、冬休み帰れるんやて」「山本君は休みか今日は、フーン」と一方的にしゃべりまくつたあと、さつさとライトバンに乗つて仕事（石部商工会館のワックスかけ）に行きました。

生活ホーム（椎の木ホーム）から通う川崎恵三君も、もう三年近くなんてんで勤めたことになりました。あちこちの職場で長続きせず、なんてんに来るようになった時、正直「こりや大変だな」と思いました。事実、今でもムラが多く、仕事のみならず、職場内での人間関係にも影響を及ぼすことが時おりみられます。もちろん健常だと思っている我々にしたところから、調子の波はあって当たり前であるから、それは決定的なことではないのですが。

炎暑のもと、自分で段取りをして無心で刈払機を動かしている時が多いのに、彼らのたまの悪い時を意識しすぎるのは、（旧）施設職員の悲しい習性か、それともやはり私自身の相も変わらぬ差別性なのでしょうが。

なんてん最古参の塚本君は、すでも

う四年が過ぎました。寒いといつてはトラックに閉じ込もつてしまつていた彼も、今では欠かすことのできない立派な社員さんです。草津の住宅管理現場の常勤で、せつせと外廻りのはき掃除や草ひきに励んでくれて、その成長ぶりには驚かされます。此の頃は「明日は定休日やから休んでや」というと、何とも悲しそうな顔で「僕はなあ、山本君たちのところで明日はするねん」と帰りの腰を上げようとしません。「そうか、じゃ栗東の片付けの現場へ……」と言いつつ終わらないうちに「ハイッ」と誰にも真似が出来ぬくらい素晴らしい返事をして、ニコニコしながら帰ります。

だいぶん腰の重くなりかけた私も、彼のツメのアカをちようだいして、心しながらいただかねばならないと思つていきます。

(56・3・31 退職)

